イケメン教師の受難

伝説の水泳大会篇

第八巻　プールの中で逆レイプ

海老沢　薫　著

内容

■著作権について
■まえがき
■第一章　イチモツに結ばれた鍵
■海老沢薫BLOG
■海老沢薫Web連載小説

※海老沢薫　BLOG
http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/

・・・サイドストーリー『イケメン教師の受難　伝説の運動会篇』や、最新作の出版情報、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■著作権について

「イケメン教師の受難　伝説の水泳大会篇　第八巻　プールの中で逆レイプ」（以下本書と表記する）の著作権は【海老沢薫】にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー）により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第119条などの罰則がありますのでご注意ください。

■まえがき

高校の一大スポーツイベントである水泳大会は若手イケメン教師の三神真琴にとって、極限の羞恥地獄と化していた。

千メートルリレーの罰ゲームとして行われたプールサイド逆立ち引き回しショーが終わり、ホッとするのも束の間、真琴はベテラン男性教師によって次の競技である三年生のクラス対抗宝探しゲームにも強制参加するよう命じられる。

イケメン教師の参加により、宝探しゲームは急遽特別ルールで行われることになり、プールサイドにそのルールがアナウンスされると、生徒達から大歓声と拍手が湧き起こった。

なぜなら、それは競技の名目で行われるイケメン教師の逆レイプショーに他ならなかったからだ。

特別ルールで行われる宝探しゲームは、プールに浮かべた沢山の宝箱の鍵をイケメン教師のイチモツに結びつけ、生徒達はその鍵を

奪い取って宝箱を開け、中に入ったアイテムをより多く集めたクラスが優勝という内容だった。

イチモツに宝箱の鍵を結びつけられた真琴は、仕方なく一人先にプールに入り競技が始まるのを待った。

而して、ついに過激な競技の開始を告げるホイッスルが鳴り響き、生徒達は一斉にプールに飛び込んでイケメン教師の元へと泳いで行った。

あっという間に水中で大勢の生徒達に囲まれ、体中を弄られ大きなオスの喘ぎ声を放って悶え狂うイケメン教師。プールサイドにいる生徒や同僚教師達はその姿を面白そうに眺め、誰もイケメン教師を助けようとする者はいなかった。

やがて、プールには真琴の断末魔の叫び声が響き渡り、哀れなイケメン教師は水中で射精を果たしたのだった。

しかし、これはまだ序章に過ぎず、高校の

屋外プールではイケメン教師の凄惨な逆レイプショーが本格的に幕を開けようとしていた。

■第一章　イチモツに結ばれた鍵

三十分以上も続いたイケメン教師の全裸逆立ち引き回しショーが終わり、高校の水泳大会はようやく次の競技が始まろうとしていた。

しかし、プールサイドはまだ異様な熱気に包まれたまま、生徒達は酷く興奮している様子だった。

引き回しショーの最後にイケメン教師が逆立ちしながら下半身を奮わせ派手に射精した姿は、高校生達にとってはあまりに衝撃的で皆その光景が脳裏に焼き付いて頭から離れないに違いなかった。

罰ゲームの最後に射精した真琴は、二人の男子生徒達に掴まれていた両脚を解放され、暫くの間プールサイドに蹲って肩で息をしながら快感の余韻に浸っていた。

長い間プールサイドを逆立ちで歩かされ、全校生徒の晒し者になった事で、真琴は心身共に疲れ果て、もうこのままプールから逃げ

出したい気持ちで一杯だった。

すると、そんな真琴の願いを打ち砕くようなアナウンスがプールサイドに響いた。

『次の競技、三年生のクラス対抗宝探しゲームは、急遽三神先生にも参加して頂き、特別ルールで行います』

次の瞬間、プールサイドには歓声と拍手が湧き起こり、再びイケメン教師の羞恥ショーが見られる事を生徒達は大いに喜んだ。

一方、プールサイドの床に蹲っている真琴は、思わず顔を上げ愕然とした表情を浮かべた。たった今、屈辱の罰ゲームが終わったばかりだというのに、また次の競技にも強制参加させるなど非道極まりない事であった。

一体僕をどこまでいじめれば気が済むんだ・・・。真琴はプールにいる全員が自分を辱めようと企んでいるように思え、恐くてならなかった。

それから、プールサイドに再びアナウンスが流れ、特別ルールで行う宝探しゲームにつ

いて詳細な説明がなされた。それによれば、プールの中に鍵の掛かった複数の宝箱を浮かべ、それらを開ける為の鍵を真琴のイチモツに紐で結びつける。そして、競技に参加する生徒達は真琴のイチモツから鍵を奪い、宝箱を開けてより多くの宝を手にしたクラスが優勝という内容であった。

競技の詳しい説明が終わると、プールサイドには再び生徒達の歓声と拍手が湧き起こった。生徒達は皆、次の競技が宝探しゲームというの下に行われるイケメン教師の逆レイプショーだと分かると、今まで以上に刺激的な光景が見られる事を期待し、目をギラギラと輝かせた。

そんな・・・。真琴は一人表情を強張らせ、不安と恐怖に怯えた。これからプールの中で水泳大会の競技という名目で大勢の生徒達に襲われることになるのだ。それを想像すると、真琴の全身は小刻みに震え、なぜかイチモツは痙攣してしまった。

「三神先生、そういう事だから早速準備するんだ！」

ベテラン男性教師はそう呼び掛けると、真琴の担任するクラスの生徒達に指示を出し、イケメン教師のイチモツに競技で使う宝箱の鍵を紐で結びつけさせた。

「あぁっ」

イチモツに三十個の鍵が紐で結びつけられると、真琴は思わず喘ぎ声を漏らした。

どうやら鍵の重さでイチモツが刺激され、下半身に快感が駆け抜けたようだった。

「先生、もう感じているのかよ（笑）」

「次の競技でもまたミルク出すんじゃねぇぞ（笑）」

「俺達にこれ以上恥を掻かせるなよな（笑）」

全ての鍵を担任教師のイチモツに結びつけたクラス委員の相葉達は、そう言って真琴の羞恥心を煽り立てた。

「・・・・」

真琴は彼らに何も言い返す事ができず、悔しさに唇を噛みしめるだけだった。ただ、水泳大会が始まってからすでに何度も射精してしまっている以上、冷やかす彼らの忠告を真摯に受け止めるしかなかった。

「三神先生、それじゃあ先にプールの中に入りなさい！それから生徒達が鍵を奪いに来たら、競技を盛り上げるためにできるだけ逃げ回るんだ」

ベテラン男性教師がそう告げると、真琴はイチモツに三十個の鍵をぶら下げた恰好でプールの中へ入っていった。

而して、競技に参加する三年生達はプールの周りを囲むように立ち、試合開始のホイッスルが鳴り響くと一斉にプールの中へ飛び込んでいった。

「先生のチ○コから鍵を奪え！」

「先生、覚悟しろよ！」

「先生、逃げるんじゃねぇ！」

プールの中に飛び込んだ生徒達は勇ましい声を上げながら、真琴の方へ向かって全力で泳ぎ出した。

あぁっ、どうすれば良いんだ・・・。真琴は自分のイチモツに結ばれた鍵を奪うために勢い良く泳いで向かってくる生徒達に踊れ戦き、慌てて逃げようとしたが四方八方から泳いでくる彼らを前に何処へ逃げれば良いか分からなかった。

そうして、真琴がプールのど真ん中で慌てふためいていると、あっという間に生徒達はイケメン教師の周りを取り囲み、彼らは一斉に水中に潜り込むと真琴のイチモツに結ばれた鍵に手を伸ばしていった。

「あぁっ、やめてくれ！」

水中で大勢の生徒達にイチモツを握られた真琴は大きな声を出して悶え狂った。

真琴の周りを取り囲んでいる生徒達は水中で宝箱の鍵を取るフリをして、実はイケメン教師のイチモツを鷲掴みしたまま扱いている

だけだった。そしてイチモツに手が届かなかった生徒達はイケメン教師の尻の方に手を伸ばし、尻肉を撮んだり撫でたり、また中には尻の穴に指を入れようとする者達までいた。

「あぁっ、馬鹿なマネはやめるんだ！あぁぁっ」

真琴は水中で必死に暴れ、何とか生徒達の手から逃れようともがいたが、大勢の生徒達に取り囲まれてはどうすることもできなかった。

「教師もあぁなると何か惨めだな」

「教師が生徒にチ○コ扱かれて喘ぐなんて、泣けてくるぜ」

「この競技が終わるまでの間に先生一体何回イクんだろ」

プールサイドに座る生徒達はプールのど真ん中で逆レイプされるイケメン教師の姿を面白そうに眺めながら、そう呟き合っていた。

やがて、イケメン教師の「あぁぁぁっ」というオスの鳴き声がプール全体に響き渡り、真琴はついに生徒達の手で射精したのだった。

プールサイドにいる生徒達の間からは自然と拍手が湧き起こり、プールの中で見事イケメン教師をイカせた三年生達を称えた。

真琴は暫し目を閉じたまま水中に浮かび、快感の余韻に浸った。周りを取り囲む生徒達は、その姿をじっと見つめたまま、誰もイチモツに結びつけられた宝箱の鍵を取ろうとはしなかった。

もはや、プールの中にいる全員の目的は鍵を奪って宝箱を開ける事ではなく、イケメン教師を逆レイプすることだった。プールサイドにいる生徒達はその事が分かるとますます興奮し、これからイケメン教師が一体どうなってしまうのか、邪な期待を膨らませながらプールの中の行く末を見守った。

それから程なくして、真琴が目を開けると、周りを取り囲む生徒達は一斉に水中に潜り、イケメン教師のイチモツや尻の穴を弄り始めた。

「あぁぁっ」

真琴はまたも大きな喘ぎ声を出して悶え狂い、その姿を見たプールサイドにいる生徒達は目をさらにギラギラと輝かせた。

ベテラン男性教師をはじめとする同僚教師達は、宝探しゲームがイケメン教師の逆レイプショーと化していることに気づきながらも、誰も競技に参加している生徒達を咎めようとはしなかった。むしろ、このままイケメン教師が生徒達の手で何度も射精を果たし、屈辱に塗れることを望んでいるようにさえ見えた。

「先生、生徒にチ○コを扱かれてそんなに気持ち良い？」

「尻の穴もヒクヒクしてるぜ（笑）」

プールの中にいる生徒達は不敵な笑みを浮かべながら真琴に向かって呼び掛けた。

「あぁぁっ、もういい加減にするんだ・・・こんなことして何になる・・・あぁぁっ」

真琴は周りにいる生徒達を必死に窘めようとしたが、その姿は却って彼らの加虐心を煽ることになった。

「先生がイク姿を何度も見たいんだよ」

「プールを先生のミルクで一杯にしてやるから覚悟しな」

生徒達はそう告げると、水中で真琴の下半身をさらに激しく攻め続け、真琴はまたしても快感の大波に呑み込まれていくのだった。

■海老沢薫ＢＬＯＧ

http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/

・・・連載小説『イケメン教師の受難　伝説の運動会篇』や最新作の出版情報、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説

『イケメン教師の受難　伝説の運動会篇』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=36195

・・・二十五歳のイケメン教師、三神真琴はその端正なルックスと気さくで優しい人柄から勤務する高校で女子生徒達のアイドル的存在だった。

しかし一方で、そんなイケメン教師の事を良く思わない男子生徒達もおり、ある日の放課後、真琴は担任するクラスの生徒達の罠に嵌まり、教師生命を脅かすほどの弱みを握られてしまう。

その日から真琴は担任するクラスの生徒達に脅迫されるようになり、自身の教師人生を守るために彼らの奴隷として服従するようになる。

時に教師としてのプライドはおろか一人の男性としての尊厳までを奪われるような屈辱を味わい、どうしようもない自己嫌悪に陥る

こともあったが、それでも真琴は生徒の奴隷として日々懸命に戦っていた。

そうして、学園の一大イベントである運動会の季節が訪れ、真琴はそこでもクラスの生徒達に脅迫されてしまう。

運動会はイケメン教師の羞恥ショーと化し、真琴は全校生徒や同僚教師、観戦に訪れた大勢の父兄達が見つめる前で、途轍もない生き恥を晒すことになるのだった。

『イケメン春輝　二十歳の憂鬱』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=31764

・・・大学二年生の藤島春輝は、大学の学園祭のミスターコンテストに無理矢理エントリーさせられ、そのステージ上で罠に嵌められ、大勢の学生達が見つめる前で死ぬほど恥ずかしい痴態を晒してしまう。

それでも見事グランプリを受賞した春輝は、セレモニーとして一糸纏わぬ姿で大学のキャンパス内を練り歩き、他の学生達の見世物になったのだった。

数日後、ミスターコンテスト実行委員会の学生から連絡を受けた春輝は、毎年恒例のグランプリ受賞者の記念写真集を製作する話を聞かされる。

今年のグランプリ受賞者の春輝は、学園祭のステージ上で前代未聞の痴態を披露した事からヌード写真集にすることが決まり、実行委員会の主要メンバーである須藤から脅された春輝は仕方なく撮影に応じることにな

り・・・。

後日、早速授業中の大教室で撮影をすることになった春輝は、一番後ろの席で須藤に命じられるまま服や下着を脱いでいき、一糸纏わぬ姿でポーズを披露する。

そうして撮影はだんだんエスカレートしていき、イケメン学生は授業中の大教室だけでなく、図書館や学生食堂でも極限の羞恥地獄を味わうことになるのだった。

『イケメン社長　聖哉２５歳　―体を賭けた屈辱の取引―　大型ショッピングモール編』

https://regimag.jp/bo/book_view/?book=18357

・・・吉川聖哉は、大学生時代に起業した二十五歳の若き事業家だった。頭脳明晰で抜群のルックスを持ち、社交的な聖哉はまさにイケメン社長と呼ぶにふさわしい華やかさを備えていた。

大学生の頃には、将来有望な若手イケメン社長として一部のメディアでも取り上げられるなど、他人が羨むほど順風満帆な人生を送っていた。

しかし、いつしか聖哉の会社の業績は低迷し、華やかだった生活は次第に陰りを見せていく。

自分に付いてきてくれる社員のため、そして自分の理想のために会社を立て直すべく日夜必死に働き続ける聖哉。

かつて将来有望な若手社長としてもてはやされていたイケメン社長は、どんな泥臭い仕

事でも引き受けるようになり、心ない取引先やユーザー達からの羞恥の命令にも従い、人生を翻弄されていくのだった。

『イケメン社長　聖哉２５歳　一体で償う屈辱のクレーム　会議室篇』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=38623

・・・２５歳のイケメン社長、吉川聖哉は大学生時代に起業し、若くして成功したカリスマ社長であった。

しかし、聖哉の会社は次第に業績が悪化し倒産の危機に瀕する状況まで追い込まれていった。

そのため、聖哉は会社存続のために新たに人材派遣事業を興し、様々な企業と取引を始める。

そんなある時、聖哉の元に大口の取引先から一本のクレームの電話が入った。取引先の相手は電話越しに聖哉を激しく罵倒し、今すぐ自社まで謝罪に来るよう命じた。

ただでさえ倒産の危機に直面している会社は、この大口の取引先を絶対に失うわけにはいかず、慌てて謝罪へと向かう社長の聖哉。

而して、取引先の会議室へ案内された聖哉

の元に担当部長と現場責任者、そして問題を起こした当事者である聖哉の会社の社員が現れ・・・。

平身低頭に謝罪する聖哉に対し、取引先の相手は誠意ある謝罪を要求し、あまりにも屈辱的な命令を突き付ける。

社長としてのプライドだけでなく、一人の人間としての尊厳までも奪われるような命令に聖哉は憤りを覚えずにはいられなかったが、自分の会社や社員を守り抜くために彼らの命令に従う覚悟を決め、ついに底なしの羞恥地獄へと堕ちていくのだった。